



神郷・哲西地区に伝わる伝統芸能。平安時代から田楽として伝わる太鼓田植は、五穀豊穰を願い、太鼓と歌に合わせて苗を植えていくもので、共同作業の慣習として伝承されてきた貴重な民俗芸能といえます。



たいこたうえ
太鼓田植【県指定】

The Goshinko-Buki-Gyoretsu Procession paints a vivid picture of life over 300 years ago.
The local Bicchu Kagura Shinto Dance has been performed for over 200 years.

ごしんこうぶきぎょうれつ
御神幸武器行列
【市指定】

沿道の見物客は行列が通過する間、座るか腰を低くして迎えます。行列の前や途中を横切ってはならず、静かに敬けんに拝観する習わしです。別名「土下座まつり」とも呼ばれています。

受け継がれる 新見の伝統



見ごたえある勇壮な舞い

備中神楽は、新見市を含む備中地方の秋祭りに奉納される郷土芸能で、荒神を勧請してその前で行うため「荒神神楽」(特定の場所に神殿を設けるため「神殿神楽」とも呼ばれます。

江戸時代後期、国学者で神官であった西林国橋が、古事記や日本書紀などの神話の中から「天岩戸開き」「国譲り」「大蛇退治」などを取り入れた、ダイナミックで芸能性に富んだ神代神楽を創作し、庶民に愛好されたことから、いつしか神事と一体になって今日の備中神楽ができたといわれています。1956(昭和31)年に県の重要無形民俗文化財、1979(昭和54)年に国の重要無形民俗文化財に指定されました。



【国指定】
びうちゅうかぐら
備中神楽

現在も、五穀豊穰を祈り、秋祭りのクライマックスを飾る庶民の娯楽として、夜を徹して舞われています。

現代に生きる
郷土のしきたり

新見船川八幡宮秋季大祭のひとつ、毎年10月15日に行われる「御神幸武器行列」は、300年以上の伝統を誇り、往時のしきたりを忠実に継承して行われています。

1697(元禄10)年、関備前守長治が初代新見藩主として大祭における御神幸の警備にあたらせたのが始まりで、青竹を持った先払いを先頭に、総勢64名の大名行列が「下ーん、下ーん」という下知の声に合わせて、新見船川八幡宮と御旅所までの1.5キロメートルを往復します。

かしらう
頭打ち
【市指定】

爽りの秋に感謝をこめて奉納される伝統的な郷土芸能で、頭に花笠や尾長鶏などの飾りをつけて鐘や太鼓を打ち鳴らします。



column

奇祭「学」

いずれも市指定



矢戸の蛇神楽
藁の蛇を持って練り歩いた後、宮の峠本山荒神社の社殿に大蛇を巻きつけ、御戸が開かないようにします。(哲多町矢戸)



神田祭り
由井八幡神社の秋の大祭で、別名「大飯食い祭」とも呼ばれ、女性が勤める大盛り飯を食べていきます。(大佐田治部)



綱之牛王神社の蛇形祭
悪さをした大蛇を退治したところ疫病が流行ったため、そのたたりを鎮めるために行われる祭りです。(哲西町上神代)



よはかり
前年に埋めたかめの中の水の状態を見て、その年の豊作を占う行事で、「世量り」の名がつけられています。(哲西町大野部)



かいごもり祭
当年の吉凶を占うもので、祭りの間、人々は各家に閉じこもり、煙をあげないという習わしがあります。(唐松)